

# 学校臨床の新展開 30

— スクールソーシャルワーカー 1万人計画の行方 —

浦田 雅夫

京都造形芸術大学



「学校臨床の新展開」などと大きなテーマで書かせていただき早7年、何とか1回のお休みだけで30回の連載。物事が長続きしない私が、内容が稚拙ながらもここまで続いたのは、叱咤激励しながら、あたたかく見守っていただいた団編集長はじめ編集にかかわっている皆様のおかげです。

さて、私は2013年度まで大学教員の傍ら週に1度、中学校のスクールソーシャルワーカーとして活動を行っていました。社会的にも、この間、子どもの貧困が注目され、「学校をプラットフォームに！」が合言葉となり、なかでも「スクールソーシャルワーカー」への期待は熱く！？、2019年までに1万人に増やす目標も掲げられました。急激な量的拡充は質の担保がなされるのでしょうか。

2017年8月1日に行われた、「子供の貧困対策に関する有識者会議」のなかでは、これまでスクールソーシャルワーカーの拡充を訴えてきた山野氏が以下のように述べています。

「学校プラットフォームについては、私も一生懸命推進しているところだが、スクールソーシャルワーカーはすごく増員されるということで、が、（議事録のまま）ど

この県もスクールソーシャルワーカーが何かできるのかわからないまま学校にばらまかれている。その人たちは、つながる仕組みがないので、学校へ一人急にぽんと入っても何もできない。そのため、数が入るといことがすごくもったいない。去年12月でも相談件数はゼロというスクールソーシャルワーカーがいた。これが実態でもある。」

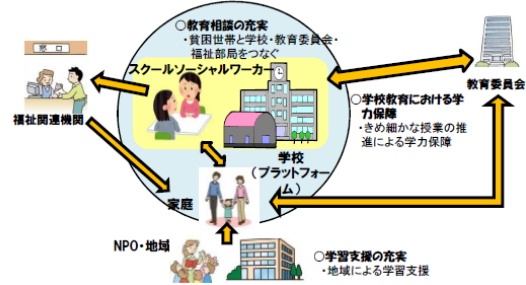
「どうやって動いていくのか、ソーシャルワークの技術というのは厚労省管轄になってくる。例えば、児童相談所の児童福祉司の研修は厚労省でとりまとめている。今回、児童福祉法改正でかなり増員されている。ちゃんと育成から手を打っているが、スクールソーシャルワーカーは全く数だけ各自治体がとにかく増やしなさいとなっているため、非常にリスク。クライアントからの連絡が携帯電話にどんどん入って、土曜日、日曜日に職業意識のコントロールがないまま動いているスクールソーシャルワーカーや自治体もある。専門職としての認識の統一や周知が自治体がない。とにかく相談があったことは全部受けないといけない、夜昼関係なく。枠がないから、週1回というような勤務のため、そんなことも起きている。」

## 学校をプラットフォームとした総合的な子供の貧困対策の推進

(義務教育段階)

全ての子供が集う場である学校を、子供の貧困対策のプラットフォームとして位置づけ、子供の貧困問題への早期対応、教育と福祉・就労との組織的な連携、学校における学力保障・進路支援、地域による学習支援を行うことにより、貧困の連鎖を断ち切ることを目指す。

【子供の貧困対策に関する大綱(平成26年8月29日閣議決定)を踏まえ】



### 学校教育における学力保障

■家庭環境などによる教育格差の解消に向けた教員定数の措置 [H27]100人 → [H28] 250人(+150人)

家庭環境などによる教育格差の解消に向けた取組を支援

### 教育相談の充実

■スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラーの配置拡充[H28要求額 58億円(+11億円)](補助率1/3)

#### ①福祉の専門家であるスクールソーシャルワーカーの配置拡充

○スクールソーシャルワーカーの配置【拡充】(週1日×3h)  
[H27]2,247人 → [H28]3,047人(+800人、36%増)

○貧困対策のための重点加配【拡充】(+週1日×3h)  
[H27] 600人 → [H28]1,200人(+600人、倍増)

※併せてスクールソーシャルワーカーの質向上のため取組を支援  
【目標】平成31年度までに全ての中学校区(約1万人)に配置  
(ひとり親家庭・多子世帯等自立応援プロジェクト)

#### ②スクールカウンセラーの配置拡充

○全公立中学校(10,000校)及び公立小学校(15,000校)への配置  
○さらに小中連携型配置【拡充】(+週2日×4h)

[H27] 300中学校区 → [H28] 3,100中学校区  
[H27] 600校 → [H28] 1,200校(+600校、倍増)

【目標】平成31年度までに全公立小中学校(27,500校)に配置  
(ひとり親家庭・多子世帯等自立応援プロジェクト)

### 学習支援の充実

■地域未来塾による学習支援の充実[H28要求額 6.3億円(+4.2億円)](補助率1/3)

[H27] 2,000か所 → [H28] 3,600か所(+1,600か所)

【目標】平成31年度までに5,000中学校区(全中学校区(1万校区)の半数)

(注)地域未来塾

家庭での学習習慣が十分に身につけていない中学生・高校生等を対象に大学生や教員OB等の地域住民の協力やICT等を活用した原則無料の学習支援

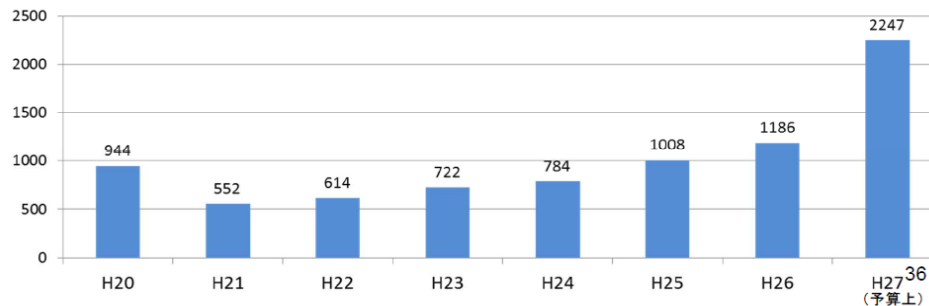
## SSWについて(配置状況)

区分\年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
予算額	1,538百万円	14,261百万円の内数	13,092百万円の内数	9,450百万円の内数	8,516百万円の内数	355百万円	394百万円	647百万円
予算上の積算人数	141地域	1,040人	1,056人	1,096人	1,113人	1,355人	1,466人	2,247人 プラス貧困対策重点加配600人
SSW実人数	944人	552人	614人	722人	784人	1,008人	1,186人	

- スクールソーシャルワーカー活用調査研究委託事業(平成20年度)—国の全額委託事業(10/10)
- スクールソーシャルワーカー活用事業(平成21度~22年度)—都道府県・指定都市に対する補助事業(補助率 1/3)
- スクールソーシャルワーカー活用事業(平成23年度~)—都道府県・指定都市・中核市に対する補助事業(補助率 1/3)

○ 平成21年度~平成24年度は、学校・家庭・地域の連携協力推進事業の一部として実施。

○ 平成25年度から、いじめ対策等総合推進事業の1メニューとして実施。



文部科学省初等中等教育局「児童生徒課学校における教育相談に関する資料」2015年より

「難しい問題は、専門家へ」しかし、その専門家と言われる人が知識と技術と倫理を持ち合わせていなければ、一番困るのは目の前の子どもたちです。今後数年で、学校現場にはどのような変化が生じるのでしょうか。「学校臨床の新展開」は、この30回を持って一旦終了させていただけたらと存じます。今後は、ライフワークでもある若者支援や社会的養護を取り上げていきたいと思います。

#### これまでのテーマ

- 1、「スクールソーシャルワーク元年」(2010年6月)
- 2、「学校と児童虐待Ⅰ」(2010年9月)
- 3、「学校と児童虐待Ⅱ」(2010年12月)
- 4、「学校と児童虐待Ⅲ」(2011年3月)
- 5、「ののさんのこと」(2011年6月)
- 6、「ひとり親がふつう」(2011年9月)
- 7、「ひとり親と子育て」(2011年12月)
- 8、「今、この時代に教員であることの辛さ」(2012年3月)
- 9、「消えた子どもたちはどこへ」(2012年6月15日)
- 10、「外国人も住民票を。しかし・・・」(2012年9月)
- 11、「家庭を支える社会資源」(2012年12月)
- 12、「子どもたちの放課後」(2012年3月)
- 13、「教育と福祉」(2013年6月)
- 14、「夏休み」(2013年9月)
- 15、「ケースの発見」(2013年12月)
- 16、「誰のニーズか」(2014年6月)
- 17、「妖怪と子どもたち」(2014年9月)
- 18、「早期発見・早期介入」(2014年12月)
- 19、「ネット社会と子どもたち」(2015年3月)
- 20、「スクールソーシャルワーカーが足りない」(2015年6月)
- 21、「此処じゃない何処かへⅠ」(2015年9月)
- 22、「此処じゃない何処かへⅡ」(2015年12月)
- 23、「居場所なき子らの生活保障」(2016年3月)
- 24、「居場所なき子らの生活保障Ⅱ」(2016年6月)
- 25、「居場所なき子らの生活保障Ⅲ」(2016年9月)
- 26、「「不登校」スクールソーシャルワーカー」(2016年12月)
- 27、「チーム学校？ チーム児童相談所？」(2017年3月)
- 28、「チーム学校Ⅱ」(2017年6月)
- 29、「変わり行くもののなかで」(2017年9月)
- 30、「スクールソーシャルワーカー1万人計画の行方」(2017年12月)